

# 中国農村百景 IV

『山西文学・1983』短篇小説集

小林 栄編・訳



中国はいま、新しいターニング・ポイントを回りはじめた。この大きなうねりの中で、時代の子＝農民大衆の生きざまと息吹を巧みにとらえた「山西文学」の決定版!!

■巻末に訳者・小林栄氏の「私の訪中記」を併載（訳者は1984年4月28日より5月5日まで山西文学月刊社の招待をうけ、訪中した）

銀河書房

## 〈訳者紹介〉

小林 栄 （こばやし しかえ）

1926年 長野市に生まれる。

1943年 長野商業学校卒業。

1966年よりNHK中国語ラジオ講座・テレビ講座を中心として独学で中国語を勉強。

1984年4月28日より5月5日まで、山西文学月刊社の招待を受けて、北京、太原、西安に遊学する。

現在 長野県埴科郡坂城町 株式会社都筑製作所<sup>つづき</sup>に勤務。

訳書 馬烽著『私の最初の上司』（長野市山崎書店）  
「山西文学」短篇小説集『中国農村百景』（Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ）（銀河書房）

現住所 長野市早苗町81-4 ☎0262-32-8031

---

## 中国農村百景

定価1,500円

1985年3月2日発行 著者／小林 栄

発行所／(株)銀河書房

長野市三輪6-17-6

善光寺下ビル

☎0262-35-6271

印刷／株式会社東信

製本／関製本株式会社

---

1985 S.KOBAYASHI 落丁・乱丁本はおとりかえします

# 中国農村百景 IV

『山西文学・1983』短篇小説集

小林 栄編・訳

銀河書房



「中国農村百景」の（四）を発刊することになりました。今回は前回と同じ文芸雑誌、中国山西省太原市で発行されている「山西文学」一九八三年の一月号から十二月号まで一年間十二冊中に掲載されました中・短編小説合計一〇一編の中から、中編小説を一編、短編小説を五編、計六編を選んで翻訳、編集いたしました。この一年間は短編小説の中にも面白い、山西農村を描いた立派な作品が多かったのですが、中編小説「朝焼けに燃える男」を是非掲載したかったので、短編小説は五編にしほりましたが、選考の段階で可成り苦勞して農村を描いた立派な作品を選ぶようにして五編を決めました。

本号の一つの特色は期せずして山西省壮年作家特集になったことです。権文学四五歳を年長として、以下王東滿 四三歳、張魯 四二歳と四〇歳代が三人続き、三〇歳代は成一 三九歳、王西蘭 三六歳、李銳 三四歳と三人が続いています。三〇、四〇歳代の作家が中心になって次々と面白く、内容のある作品を発表されることは、山西文学がその若い力によって益々発展されることを意味し、山西文学を

愛読し、日本に紹介している一人として喜びに耐えません。しかも本当に農民の生活に密着し、その悩み苦しんでいる姿をまとめた作品の多いことは農民文学がより生長し、発展する兆しとして、それを育てる努力に作者も読者も一体となって励むべきことでしょう。選考しながらスペースの狭さをつくづく感じました。

わたくしはささやかな翻訳を続けている努力を認められまして、一九八四年四月二八日より五月五日まで、山西文学月刊社の招待をうけて、妻と二人で北京・太原・西安を旅行させて頂きました。各地の名勝旧跡を参観し、太原では山西省の多数の作家とお会いしお話しできたことを心から嬉しく思います。また太原市南郊区金勝生産大隊では僅かな時間でしたが農民の方と話し合いもでき、縫製工場など副業の発展状況から、結婚式の始まる前の新婚さんにもお会いでき、農村の生活を垣間見られました。山西文学月刊社の方の手厚いもてなしに感謝し、巻末に「わたしの訪中記」としてまとめてみました。

中国農村は農業の各戸請負生産制がしっかりと根付き、その上に余剰労働力を利用して養鶏、養豚はもとより縫製、農機具製作などいろいろな副業が奨励され、農家の収入も増加して、各地に年収一万元（日本円で一〇〇万円余り）の「万元戸」が現われています。この経済的な変化につれて、古い生活用式や古い生活習慣がう

ち破られ、新しい生活へと変化して行ってます。若い人はこれにうまく付いて行きますが、付いて行けない年配の人も多いことでしょう。大きく変りつつある中国農村を中国の作家たちは巧みにとらえ描いてくれています。わたしは「山西文学」に掲載されたこれらの作品を日本に紹介し、日中友好の一助にしたいと励んでおります。

皆さんのご叱正をお待ちしております。

一九八五年一月

訳者 小林 栄



中国農村百景Ⅳ——目次

はしがき 3

麦播機の鈴の鳴る頃……………王<sup>ワン</sup>西<sup>シー</sup>蘭<sup>ラン</sup> 9

朝焼けに燃える男……………王<sup>ワン</sup>東<sup>ト</sup>満<sup>マン</sup> 55

壁耳ニュース社情報……………李<sup>リー</sup>銳<sup>ロイ</sup> 183

陳家のできごと……………成<sup>チン</sup>一<sup>イー</sup> 207

つづら折りの山奥の村で……………権<sup>ケン</sup>文<sup>ウェン</sup>学<sup>シェ</sup> 249

口から出かかった言葉……………張<sup>チャン</sup>魯<sup>ル</sup> 281

わたしの訪中記……………小林 栄 303

あとがき 311

挿絵／『山西文学』より

# 麦播機の鈴の鳴る頃

王<sup>ワン</sup>

西<sup>シー</sup>

蘭<sup>ラン</sup>

## 著者略歴

王西蘭<sup>ワンシーラン</sup>

王西蘭は三十六歳の男性。高校卒業の  
のち、小学校、中学校の教師を勤め、県  
の文化館の館員なども勤め、現在は山西  
省永濟県文化局の局長です。一九七二年  
から創作の学習を始め、一九八〇年以來  
二十数編の小説を書き、「閨門」は一九八  
〇年「山西文学」優秀作品に選ばれ、こ  
の作品も一九八三年「山西文学」優秀作  
品に選ばれました。なお中国作家協会山  
西分会の会員でもあります。

### 訳者の一言

共産党支部書記といえは支部委員長、村では最高の指導者である。その支部書記、丁志農の麦播きの日の半日の記録である。集団労働から各戸生産請負制へと農地が分けられ、各戸単位の農作業が行われると、最早耕作を指導するという仕事がなくなり、一農民となる。農作業できたえられていない彼は麦播きが出来ず、自分の無力感と指導者の權威の地に落ちたのを知り、平等な人間としての交際の大切さを知る。そんな心境の変化をこの小説は短編としてうまくまとめています。老農民としてのおやじの頑固さもうまく描かれている。欲を言えば二狗アルテラの家の話になどふれず、主人公の描写を細かく、描いたらもっと面白かったのではなからうか。

一

今日は麦播きである、しかも人が麦播機を引かなければならないのだ。

共産党の党支部書記（日本で言うと党支部委員長）丁志農<sup>チシノ</sup>がおやじに呼び起こされた時は、空がやっぱんやり明るくなったところだった。家を出掛ける時、かみさんが腰をひねらぬよう、足の筋を違えぬよう気を付けなと注意したが、少しも気にかけずに答えた。

「おまえはご飯を作ることだけを気にしていればいいぞ、四十歳になったばかりだ、腕も足もまだしっかりしているわ、麦播機引く位わけはないさ」

この時東の空にはまだ星が明るくまたたいており、この二番鶏が鳴く時に起きて麦播機を引いて種播きしなければならず、折しも気分悪くも、おやじにふとんの中から

一

今天种麦，而且是人拉耨。

党支部书记丁志农被爹叫醒的时候，天才麻麻亮。临出房，媳妇叮咛他小心扭了腰，闪了腿，他满不在乎地回答：“你只管做你的饭。刚平四十的年纪，胳膊腿还浑全，拉耨就拉耨！”这会一看东边天空中还闪着亮的星星，一想自己不得不在这鸡叫两遍的时候起来拉耨种地，而且是被老爹没好气地从被窝里喊出来，心里就不免觉得灰灰的又愤愤的了。

呼び起こされて、気持ちはいくさくさして、またプンプンしないではおれなかった。

だが一言もうつぶんを晴らす言葉を口に出さなかった。生産隊で家畜を請負って飼う話をした当初に、おやじは病気で、自分たち夫婦は家の中で飼ってきたなくなるのと、夜中でも草や飼料をくれてやらねばならず、しかも鳴いて人を呼ぶのを嫌って、いらないと言い、今になって人が麦播機を引かなきゃならなくなっても、誰を恨まれようか。ましてや三歳の時に母が亡くなり、おやじの手だけで大きく育てられ、党支部書記の仕事をして家を離れて腕を伸ばし足を投げ出してきたけれど、家では孝行息子だと言われ、これまで口答え一つしなかったではないか。

もう一度党支部で討論し、党大会で皆を集めるまでもなく、もう一度何々を柱として小麦の種播きを立派にせよという文書を読んだり、マイクの前で腕を振って小麦

---

可是他连一句泄愤的话都说不起。当初队里讨论包养牲口，老爹病着，他两口子嫌那牲口喂在自家院里腌臢，晚上添草喂料又吵人，就没要，到如今落得人拉耒，怪谁？何况三岁以上离了娘而靠老爹一手抓养大的他，别看当支书在外头伸胳膊撂腿，在家里还算是个孝顺儿子，从来是不顶嘴碰舌的。

用不着再去支部讨论、大会动员了，用不着他再去念以什么什么为纲种好小麦的文件和在麦克风前振臂高呼“为播种小麦而奋斗”了，也用不着他骑着自行车到各生产队周游列

の種播きのために力を出そうなどと大声で叫ぶまでもなく、自分で自転車に乗って各生産隊をそれぞれに回って歩き、調査し督促することも必要なくなった。家庭を中心とする労働組織の中では、自分はただ気性の激しいおやじの指図のもとでの普通の作業者にすぎないのだ。大いに気持ちは軽くなったが、一方では大変重苦しくなったのではないか。まだ真剣に考えたことはないようであった。四十五ヘクタールの一期作と二期作の麦畑で、肉体的にそして特に言うところ精神的にもどんなに困難でしかもきびしい試練を受けねばならないかということはまだ知らなかった。

今のところ、ただおやじの言い付けをおとなく聞いて、半人前の二人の子供を引き連れて、麦の種を入れた布袋と、麦播機と、種を汲み込むひしゃくなどの道具を乗せた小さな大八車を引いて、薄明るくなった田舎の道を歩いて行った。

---

国、检查督促了。在以家庭为单位的劳动组织中，他只是一个受自己那怪脾气的老爹指挥的普通战斗员。他是轻松了许多，还是繁重了许多？他好象还没有认真地想过呢。他不知道，在那六亩八分原麦地和回茬地里，他在肉体上特别是在精神上将经受怎样繁重而严峻的考验呢。

而眼下，他只有顺从地听老爹的吩咐，率领着他那两个半桩小子，拉起装着麦种布袋、种麦耩和舀籽瓢等等家什的小平车，走上朦胧中的乡间土路上去。

みんなが麦畑に着いた時、空はもうすっかり明るくなっていた。畑一杯に、晩秋の朝にいつもあるあのかすかな湿気を含んだ土の香りが満ちあふれている。遠くの中条山<sup>テヤオ</sup>は、ふもとに薄い霧のベルトを付けていた。これは秋の刈り入れ麦播きの忙しい季節に入り、人民公社の平らで果しない麦畑の中に、丁家庄<sup>チンジャヤチゼン</sup>生産大隊が始めて各家を単位として、それぞれ違った畑にすずめ戦術式の夜明けの総攻撃を進めようとしている所であった。牛を追ったり、ろばを引いたり、人がたすき掛けで引いたりして、誰かが一せいに号令をかけるのを待つことなどなく、すぐに仕事に取りかかる。チンタン、チンタン、チンタンと畑一杯に麦播機の鈴の音が響きわたっていた。大変忙しくにぎやかな様子である。

## 二

他们来到原麦地块的时候，天已经大亮了。满地里，弥漫着深秋的早晨常有的那淡淡的潮乎乎的地气。远处的中条山，腰里缠着几条淡淡的雾带。这是进入收秋种麦季节又一个繁忙的日子，在人民公社的平坦无际的麦田里，丁家庄大队第一次以各家各户为单位从不同的地块上进行麻雀战术式的拂晓总攻击。牛拉的，驴拽的，人拉套的，不等谁统一号令就立即开始行动。“嘀嗒、嘀嗒、嘀嗒、嘀嗒”满地里回响着耒铃叮当的声音。好一个繁忙而

丁志農<sup>チンチン</sup>

丁志農は始めもの淋しい失望にぼんやりしてしまつたが、その後情勢が大分きびしいのに気が付いた。この作業者数では手不足なのだ。昨晚、自分で数を胸算用していなかった。今までは家で塀を作ったり、家を建てたりする時などは同じように、手伝いの人が時間を見て庭に集つてくれ、働く人の手配や仕事まで主人が気を使わんで良く、自分の生産大隊や生産隊の幹部や同僚たちが来て計画を立て指図してくれた。今になって、このきびしさに近い事実を考えなければならなかった、皆忙しく時間を惜しんで自分の家の麦を播いていて、誰かが来て手伝ってくれることまで考えられようか。

彼は自分を数に入れねばならなかった、しかも一番力の強い労働力として。おやじは、もちろん麦播きの名人であり、種を播きながら指図しよう。十二歳の小龍<sup>シャロン</sup>は、一人前としては使えない、当然脇で引く仕事だ。自分は、梶棒の中に入って麦播機を支えなければならない、二人

### 熱鬧的阵势哟！

丁志农起初觉得一阵被冷落的怅惘，后来就意识到形势有些严重：他这个战斗单位兵员不足。昨天晚上，他还没把自己算在数里。象往常家里打墙、盖房那样，帮忙的人会按时拥进他的院子里，就连组织劳力安排活计也不用他这主人操心，自有他那一伙大小队干部同僚们去参谋指挥。到如今，他不得不考虑这近乎严酷的事实：都忙着抢节令种自家的麦，谁顾得上来给他帮忙呢？

他只好把自己算在数里了，而且是一个最